

文学科 中学校一種・高等学校一種（国語）

【教員養成の理念】

本学は学則で、「教育基本法及び学校教育法の定めるところに従い、仏教の精神に則り、人格を育成するとともに、仏教並びに人文に関する学術を教授研究し、広く世界文化に貢献する」（大谷大学学則第1条）ことが大学の目的であると明記しています。この目的を文学の追究という方法によって実現しようとするのが文学科です。本学科は、日本と諸外国の文学を主な研究対象とし、それら文学作品の精読・分析・解釈・批評を通して、文学に関わる総合的な知見を修得すること、および豊かな想像力を培うこと、さらにそうした読解力の養成を通して、人間と社会と思想に対する深い理解と鋭い洞察力を獲得することもめざしています。

初代学長清沢満之は「開校の辞」において、本学が「他の大学とは異なりまして宗教学校なること、ことに仏教の中における浄土真宗の学場であります」と述べています。こうした仏教精神に基づく教育・学術研究という理念は、文学科の教員養成の理念でもあります。また、第三代学長佐々木月樵は「樹立の精神」において、本務遂行・相互敬愛・人格純真を三つのモットーとして掲げました。昨今の教育の現場は様々な生徒の対応に追われています。社会性の未発達、いじめ、コミュニケーション能力の低下、他者への思いやりの不十分さ、学力低下といった実に多種多様な問題を学校は抱えています。このような複雑な状況にあっては、専門的な知識を備えるだけでは不十分です。①高い教職意識と責任感を持つ（本務遂行）のは当然ですが、②コミュニケーション能力・対人間関係能力を通して他者を尊重し（相互敬愛）、③子どもたちの声に耳を傾けることのできる教員（人格純真）、すなわち本学の三モットーを具現化でき、かつ宗教的情操をもあわせもった教員の養成が必要なのです。

本学が仏教精神に基づく宗教的情操を培うことに主軸を置いていることはいうまでもありませんが、それと共に本学は、民族・人種・性・出自・思想・信条等における差別（意識）を撤廃すべく、講演・研究会等を定期的で開催して持続的に人権教育にも力を入れています。さらに近年、学習に対する能力と意欲とを兼備していることが必須条件ではありますが、本学では身体障害・精神障害・学習障害等のある者を積極的に入学させており、キャンパスでは学習面でも生活面でも、障害を持つ者と持たない者とが相互に関与・協同する形が常態化しつつあります。

国語科教員はさらに、言語体系を整え、言語感覚を磨く必要があります。人間の思考やコミュニケーションにとって「ことば」は不可欠です。しかし、現代はそうした「ことば」への注意力が不足している時代でもあります。インターネット上での無責任な発言などはその一例でしょう。現代の社会では、上述した諸要件にくわえて、言語に関わる教科においてはおのこと、「ことば」に敏感な教員の育成が必要です。

本学科では、人間の思考と感性の形成に密接に関与するという点でたいへん重要な読書行為を、体系的に学生たちに課しています。文学がすべて言語によって構築されている以上、文学研究の前提として、あるいは文学研究と併行して、「ことば」の探究も行われなければなりません。言語とは何か、言語と人間との関係はいかなるものか、といった大きな問題に対峙すると同時に、身近な当たり前のものとして等閑に付されがちな日本語を、初めて出会うもののように客観的かつ綿密に見直すことが、各人が自分にとっての言語の意義と役割を確認し実感するためには大切であると考えます。本学科では、学生たちが文学作品を形作る多種多様な日本語に接することによって、自らの言語体系・言語感覚を客観的に評価し、人間・社会・思想に対する広範な関心を抱くようになることをめざしています。

国語教育の眼目が、日本語で書かれた文章や詩歌を通して、また日本語の表記手段が由来する中国古典文献を通して、子どもたちが自らの日本語力と思考力を向上させ、人格の陶冶を行い、他者への通路を開拓することにあるとすれば、本学科の教育理念は、ほぼそのまま国語科教員養成の理念に重なるということができます。

【理念を実現するための教員養成の構想】

教員にふさわしいしなやかで高潔な人格を培うため、本学では宗教的情操を養成する「人間学Ⅰ」「人間学Ⅱ」を設置しており、また自己の専門外の分野をも学習できる履修方法を設けています。もちろん教員には十分な専門的知見と言語を教育的に駆使する技量も不可欠ですから、文学科では国文学・国語学、および中国文学・中国語学に関する知識と教養を修得できるカリキュラム、並びに文章表現力を実践的に向上させるカリキュラムを編成しています。

時代別・分野別に区分すれば、古代・中古・中世・近世・近現代の国文学と国語学、および中国の古典文学と中国語学、これらすべてに対応する専門教員が揃っている本学科では、「概論」から「講読」や実践的科目を経て自己の専門領域を定め「卒業論文」を執筆するまで、段階的に無理なく緻密な学習を進めてゆくことができます。

このプロセスを母体として支えるのが全学年に配置されている「演習」です。「演習」における教員からの示唆や指導、他の学生との討論や共同調査等が、専門性の向上と視野の拡大に大いに貢献することはいうまでもありませんが、こうした鍛錬の場での諸々の行為を通して、学生たちが自己の人間観や世界観をおのずから深化させてゆくことも大切です。「演習」の場では多かれ少なかれ何らかの失敗がつきものですが、そうした体験の積み重ねがひいては人格・教養・潜在していた能力の陶冶をもたらすものと考えられるからです。

第3学年と第4学年が合同で行う大学後半の2年間の「演習」では、学生は、知識・学力・人格・意欲がそれぞれ異なる人々に、自分の解釈・見解・主張を言葉と論理を尽くして語り、説得する能力が求められます。教員としての技量の養成という観点からいえば、これは絶好の機会に恵まれているということにほかなりません。

【学科として養成したい教員像】

本学が建学の理念として掲げる初代学長清沢満之の「開校の辞」では、「我々が信奉する本願他力の宗義に基づきまして、我々において最大事件なる自己の信念の確立の上に、その信仰を他に伝える、すなわち自信教人信の誠を尽すべき人物を養成するのが、本学の特質であります」と述べられています。この辞は、人間は生きるために他者を必要とすることを深く理解し、他者と共にどのように生きるべきかという問題に真摯に向き合っており、その成果を他者と分かち合おうとする人物を養成し社会に送り出すという本学の使命を述べたものです。

人間が他者と共に生きようとするとき、もっとも重要となるのは「ことば」にほかなりません。そのため、文学科の教育においては、「ことば」による究極の構築物であり文化的遺産でもある文学作品の読解を通じて「ことば」への感覚を養うこと、すなわち、「ことば」によって成立する物語世界の背景に人間の文化や社会を看取る能力を身につけることをめざしています。

そのため、文学科において養成したい教員像とは、文学作品の読解を通じて養った「ことば」への感覚を基に、「ことば」の背景に目を向けることの重要性を生徒たちに伝えることができる教員です。つまり、文学を学ぶには、言語だけでなく、その背景にある文化・社会・歴史を理解しようとするのが大切であることを、自らの体験と実践を踏まえて教えることのできる教員です。

文学を好み学ぼうとする人間にはいくつかのタイプがあります。物語や登場人物に対する興味から、あるいはそれらの魅力に惹かれて、小説を読むようになった人もいますし、「ことば」の不思議さや面白さが契機となって詩が好きになった人もいます。文学作品の構造や批評理論により強い関心を持っている人もいます。本学科では、いずれのタイプの文学愛好者も大切にしたいと考えています。それは様々な要素の集積・連関によってこそ成立するというのが文学の原理であり、どの要素にも必然性があるからです。どのような入口であろうと、文学への入口に間違った入口などありません。

多角的なアプローチが可能であることは、その作品が優れた文学であることの証拠ともいえます。それゆえ、個人の本来の関心を大切にしながら、別の角度から視線を向けてみることの大切さにも注意を促しています。文学を多角的に捉える修練を積んだ眼差しは、人間や社会に向けられると、それらを多様な角度から広く深く見渡す眼差しになります。この眼差しは、自分の中に眠っていた新たな自分と出会う機会をも用意します。第三代学長佐々木月樵が示した本学の目標の中に、「仏教の学界への解放」、すなわち「一宗一派に偏らない学としての仏教学」の宣揚があります。多様な観点を包含してこそ豊かな成果が得られるという点で、本学科の文学への取り組み方は月樵の目標と通い合うものです。

今後の教育現場では、価値観の多様化とグローバル化という一見矛盾した両ベクトルに対応しなければなりません。他者なしに自己は生きられないように、グローバル化の進ん

だ今日の世界において、他国なしに自国だけでやっていくことは事実上不可能です。教員はこれまで自分の生きてきた世界とは異なる価値観や文化に対する理解を深める必要があります。国の内外で政治・経済の変動が激化しつつあり、また国内では少子化や子どもの貧困化が進んでいます。こうした問題にも教員は現実的・具体的な対応を迫られます。本学の教育環境および本学科カリキュラムに基づく訓練により、国語科教員として十分な知見と学力を有し、しなやかで豊かで、なおかつしっかりした宗教的情操を基盤としつつ、子どもひとりひとりに対しても、個々の案件に対しても、多様な観点から臨機応変に向かい合うことができる教員。本学科が養成したいのはそのような教員です。だからこそ、「ことば」の背景への関心を持ち、そこに目を向けることのできる教員を文学科の教職課程において養成したいと考えています。